

ドイツのインクルーシブ教育の現状

－ドイツ聴覚障害教育の研修報告－

眞田進夫・川門前泉・西分貴徳・鄭 仁豪

平成30年度筑波大学・ドイツ学術交流会（DAAD）パートナーシップ・プログラム（筑波－DAAD 共同研究プログラム）により、ドイツのミュンヘン大学（LMU）教育心理学部聾教育部門や、聾学校、インクルーシブ教育を行っている通常の学校等を訪問し、ドイツの聴覚障害者を取り巻く教育環境や教育実践に関して研修を行った。子どもと保護者のニーズに合わせた教育を実践するシステムについて示唆を得ることができたので報告する。

キー・ワード：ドイツ 聴覚障害 インクルーシブ教育 職業教育

1 はじめに

平成30年度筑波大学・ドイツ学術交流会（DAAD）パートナーシップ・プログラム（筑波－DAAD 共同研究プログラム）により、鄭仁豪学校長を含めた本校教員4名と筑波大学博士課程の学生1名（石田祐貴氏）が、11月4日から13日まで（移動日を含む）ドイツのミュンヘン大学（LMU）教育心理学部聾教育部門や、聾学校、インクルーシブ教育を行っている通常の学校等を訪問し、ドイツの聴覚障害者を取り巻く教育環境や教育実践に関して研修を行った。本研修日程は、ミュンヘン大学の Annette Leonhardt（レオンハルト）教授（部門長）と本校学校長が相談し、決定された。

事前の勉強会では、ドイツの教育システム（鄭, 2012）等について本研修の参加者それぞれが担当して調べて報告したり、以前本プログラムにおいて研修した、筑波大学博士課程の学生の報告（鈴木他, 2014）を聞いたりして、本研修の目的を次のように設定した。

- ・最新のインクルーシブ教育の情報を得ること。
- ・インクルーシブ教育における実際の支援や配慮点について知見を得ること。
- ・ドイツの職業教育の実際を見ること。
- ・学術交流会のまとめとして、ミュンヘン大学教育心理学部聾教育部門でのカンファレンスにおいて日独双方（ミュンヘン大学からは本年度6月に来日し研修された）の研修成果を報告し合うこと。

2 各見学先について

ドイツの教育制度は日本と異なるため幼・小・中・高を3-6-3-3とは区切ることができない。また、進路により複雑に変化するシステムであるため、ドイツの制度そのままで記述すると、煩雑になりかねない。以下ではイメージがしやすいように、日本ではおおよそどのあたりの学年かを当てはめて表記する。

(1) Johanneskirchen

Johanneskirchen はミュンヘンにある聾学校である。この学校は、幼稚部から高等部まで併設されていた。

最初に見学したクラスは幼稚部相当のクラスで、7人のクラスの中には聴覚障害児以外にも、ドイツ語を母語に持たない（故に通常学級での学習が難しい）幼児や、本人は健聴だが両親が聾者という幼児も在籍していた。

いずれも、言語的なサポートが必要という共通点を持ちながら、それぞれの背景に合わせた、多様な支援も必要とする幼児であり、そのような幼児たちが一つの教室内で学ぶ、一種のインクルーシブ教育が行われていた。授業では「s」の発音について、教師との対話を中心に学習が進められていた。幼児たちは他のクラスメートに合わせたコミュニケーション方法をごく自然に使い分けている様子が見られた。インクルーシブ教育の成立には、このような早期段階からの導入が重要

なのではないかと感じさせられた。

次に、小学3、4年生相当のクラスを参観した。教室にはロジャーシステム専用マイクが児童全員の机の上に設置され、発言はマイクを通していった(Fig1)。この授業では「st」の発音について学ぶ学習をしていたが、ほぼ口話でのやりとりで進められ、音韻サインのようなものは「st」の細かい発音の確認程度の使用であった。ICT機器はそれほど多用されておらず、直接的なやりとりを主とする指導であった。児童が椅子に座っている時間は短く、ダンスやレクリエーションを通して楽しそうに発音を学んでいた。

どちらの授業でも、アルファベット1文字や2文字に対して様々な単語の例を出し、発音を綿密に確認していた。一つの発音に対して非常に時間をかけている様子が伺え、丁寧に一人ひとりに繰り返し話しかけながら、細かく指導している様子が印象的であった。



Fig 1 各机に設置されたロジャーシステムマイク

(2) Berufsbildungswerk - BBW

BBWとは、和訳すると「職業訓練学校」といった意味合いであり、障害のある人が必要な支援を受けながら専門技術を学ぶことができる場である。

ドイツにはBBWが53校存在し、内5校が聴覚障害者のための学校である。見学したBBWもそのうちの1校であり、聴覚障害者以外に言語障害者も通っている。小学校相当の学校を卒業してから通う児童もいれば、高等学校相当の学校を卒業してから通う生徒もおり、幅広い年代の子どもたちが学んでいる。

BBWは各学校で特色があり、学ぶことができる技術の程度や、専門分野などが各校異なる。見学したBBWでは、比較的ハイレベルな技術を身に付けることを目的としており、金属加工や木材加工、建築技術、メディアデザイン、製本技術、塗装技術、自動車の精密部品の設計・製造等、本人の能力と進路に合わせて多様なコースが用意されている。

BBWはデュアルシステムという体制で運営されている。これは、企業のワークショップと職業学校の二つで構成される教育システムであり、日本でいう徒弟制度がイメージとしては近い。週の半分以上を企業ワークショップで、残りを職業学校での座学によって必要なスキルを身に付けていく。職業学校では企業から講師が派遣されることもあり、最新の技術を学ぶとともに、ワークショップで実際に仕事の依頼を受けて、製品の製造から納品まで行う(Fig2)。特に、自動車の精密部品に関しては、非常に高い技術力を身に付けることが目標とされている。



Fig 2 精密部品の製造が可能な設備

また、学生のサポートに関しても、ソーシャルワーカーやカウンセラーによるサポートを行うネットワーク部門などを備えている。

このBBWは、公的な補助が手厚いというのも、大きな特徴である。職業学校については州から補助金が出ており、企業ワークショップや前述の各種サポートに関しては国から学生一人当たり4000ユーロ(約50万円)月の補助金が出ている。

卒業後のサポートに関しても、卒業生が企業に就職

するまでのコーディネートをする全国的なネットワークが構築されている。

BBWは、金銭面・生活面の両面で手厚いサポートの元、学生が最新の技術を学ぶ機会を与えられ、即戦力の技術者として卒業できる場であった。また、全国的なネットワーク構築によって就職先も見つけやすくなっており、BBWが社会の中に一つの大きなシステムとして組み込まれているのが非常に印象に残った。

(3) Institut für Hören und Sprache

ミュンヘンを離れ、同じバイエルン州のシュトラウビングにある聴覚障害の幼児児童生徒の教育施設の見学をした。ここには専門スタッフが常駐する人工内耳センター、デイケアセンター（日本でいう学童保育のようなもの）の機能を併せ持つ寄宿舎も併設されており、授業の様子だけでなく、マッピングをする様子や、寄宿舎で過ごす子どもたちの様子も見ることができた。この学校に通う子どもたちは、幼稚部相当が約30人、小学部相当が約100人、中学部相当が約240人である。小学部・中学部のうち、聴覚障害のある児童・生徒は約290人、言語障害のある子どもは約50人おり、他にも他国からの移民の子どもたちも多数在籍していた。

聴覚障害のある子どもたちは、主として手話で学習するクラスと、主として口話で学習するクラスに分けて編制されているとのことだった。また、口話クラスでは、言語障害がある健聴の子どもも同じクラスで学習していた。ここでいう言語障害とは、日本で一般的にイメージされる構音障害だけではなく、学習の遅れなどに起因する語彙の少なさやことばの遅れなども含まれている。

障害や学習の遅れに起因する語彙の少なさが読み書きにも影響するため、ことばによる説明が苦手な子どもや単語単位では文そのものは読めるが文章全体の内容を理解することが難しい子どもたちが、自身の体験を元に話しやすい内容を題材とした話し合い活動を行い、それを掲示物にまとめる授業も参観した。

教室環境の点では、各クラスの子どもの実態に応じて、机の配置が馬蹄形であるかどうかや、ロジャー等の補聴システムが導入されているかどうかなどの相違

があった。しかし、拡大投影機やOHP、電子黒板、iPadなど、各授業で様々な機器が使用され、壁面にはアルファベットと指文字で表した子どもの名前、算数の単位変換や計算方法をまとめたものなどが掲示されており、日本の聾学校との共通点も多くあった。

この学校では、障害や実態の異なる子どもたちが同じ教室で学習していたが、教師は子どもたちの様子をよく見ており、様々な教材を準備したり、子どもが課題に取り組む時間を十分に確保したりし、個々の学習過程を大切にしていた。また、それぞれの授業でのルール作りがされており、楽しい雰囲気の中でも子どもたちは教師の話をよく聞き、授業に集中している様子が印象深かった。

(4) Grundschule am Hedernfeld

インクルーシブ教育を行っている通常の小学校も見学することができた。通う児童は6～10歳であり、全校児童は220人、内40人が特別な支援を要する児童である。1クラスは20人程度で、教室にはロジャーシステムが導入されている。教室内4か所に専用マイクが配置（移動可）され、黒板横には線状スピーカーが設置されていた。

見学したクラスでは一人が聴覚障害児で、他にも言語障害や学習に遅れのある児童もいるなど、児童の実態は多様であった。教室内にはアシスタントティーチャーがおり、課題につまずいている児童への支援をしていた。聴覚障害児の椅子は回転する椅子になっていて、発言する友だちの方を向きやすいように配慮されていた。

授業では、最初に見学した聾学校同様、身体を動かして五感を使う学習が印象的だった。その中でも、特に印象に残ったのは、数字の8を学ぶ授業であった。

児童は8をきれいに書く練習をし、最終的に8がきちんと書けるかどうかのテストを教師から受けるのであるが、その過程で12個の教材を用いて、8とはどのような数であるのかを直観・抽象の両面から身に付けられるように考えられた授業であった。一例を挙げると、砂の上に指で8を書かせる課題や、廊下の床に貼られた大きな8の字のテープに沿って歩くことで8の形を覚えていく課題等の直観・感覚的な教材、5個

ずつに区切っている10個の玉を使って5+3あるいは10-2として8を作る課題や、さいころを二つ投げて目の和が8になるまで繰り返す課題等の数学的・抽象的な教材があり、8という一つの数字に対して多面的な見方ができるように非常に工夫されたプログラムになっていた(Fig 3)。日本でも同様のことを取り入れるかどうかは別として、非常に興味深い取り組みであると感じた。

しかしながら、課題の一つとしては、教員の負担が大きいという面が考えられた。参観後の教員との談話では、多様性のある子どもを同時に見るのは、高い専門性を必要とするうえ、教員一人にかかる負担が大きいという話題が出た。この学校の教員は、フルタイムが15人、パートタイムが14人の構成であり、その人員で児童一人ひとりに対して1週間ごとの細かな個別プログラム作成や、進捗具合の報告をしなくてはならない等、教員一人当たりの負担は非常に大きなものとなっている。

この点は日本でもインクルーシブ教育推進の大きな課題として挙がっており、インクルーシブ教育に先進的に取り組むヨーロッパにおいても、未だ課題として残っていることが分かった。

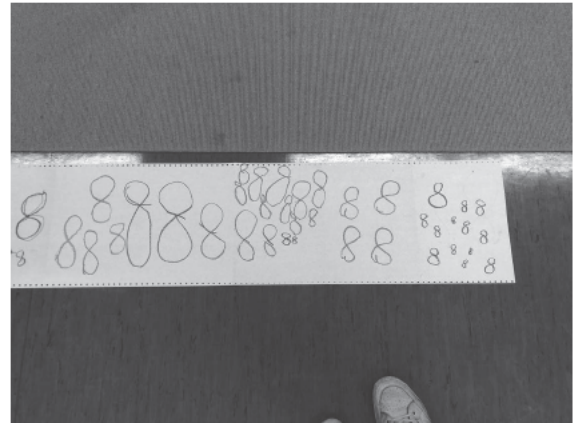
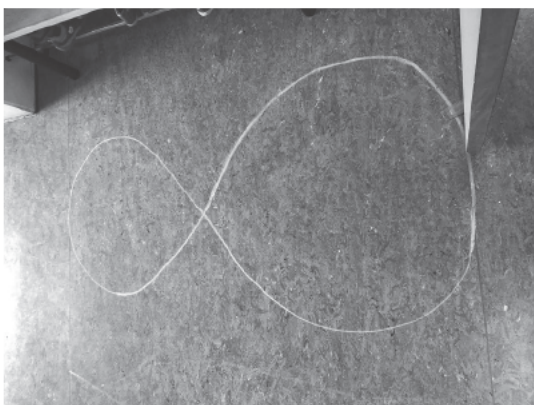
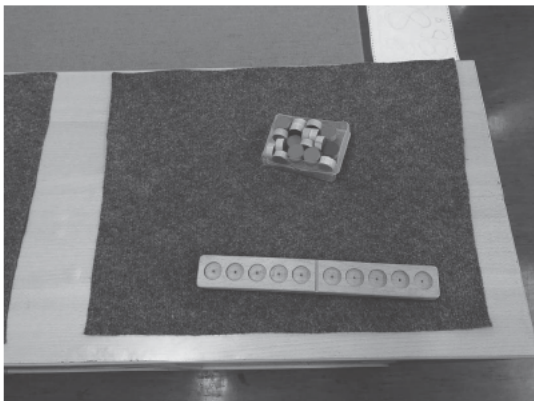


Fig 3 「8」を学ぶために使う教材

3 報告会について

報告会には、Leonhardt 教授をはじめとするミュンヘン大学の先生方、同大学院生と我々が参加した。まず、ミュンヘン大学の先生方が来日した際に研修した内容の報告があった。先生方からは、特に、日本の通級指導のシステムについて感銘を受けた旨の言及があった。それは、通常学級で学ぶ聴覚障害の児童生徒に対するインクルーシブ教育での補いの指導が通級指導教室において丁寧に行われていることについてであった。通級指導教室では、教科の補習だけではなく、ニュースを取り上げた話し合いなどを通して、一人ひとりの課題にあった、言語的な指導（自立活動の内容）を多く行っていることが、子どもたちの言語力、学力を下支えしているであろうとまとめられていた。日本での所謂「わたりの指導」は、中学生になったとしても、聴覚障害の子どもたちに意図的に指導していくことの必要性は、ドイツの子どもたちにおいても同じなのであろうと感じた。

我々は、授業参観、施設見学、見学先の教職員の方々との懇談を通して見聞きした、日本とドイツとの共通点、相違点について示した上で、分かったこと、感じたことを報告した。特に、インクルーシブ教育の観点から、本稿2で述べたような内容について発表した。スライド資料は、前日までに各分担をまとめ、全員で確認作業を終えてから、この会に臨んだ。双方の国では当たり前のこととして捉えている教育のシステムや指導をする上で重要視していること等について意見交換をすることにより、お互いにそれぞれの国の良さや課題を改めて確認することができ、大変有意義な時間となった。

4 まとめ

以上の研修を通し、当初の目的であった、ドイツのインクルーシブ教育について、以下の知見が得られた。

(1) インクルーシブ教育のシステムについて

・聴覚障害の子どもたちの教育施設には、授業だけでなく、発音指導や聴力測定、人工内耳のマッピング、保護者の相談を受ける部門、一般校に在籍する聴覚障害児やその教師を支援する部門などが備えられている。

・聴覚障害に限らず特別な支援を必要とする子ども(言語面、情緒面等)に対して、指導プログラム(個別の指導計画)や教室の環境面(ロジャーシステム、アシスタントティーチャー等)での配慮がなされている。

・障害に起因する課題に対する個別の目標が細かく設定された指導プログラムがある。

・職業訓練学校では、たくさんのコースを設定している。また、企業の協力を得て、デュアルシステムを取り入れている。聴覚障害以外にもコミュニケーションの面で課題のある学生も受け入れており、その点でインクルーシブ教育とも言えるのではないかと。

・教育のシステム面の充実、財政面にかかる比重が大きいが、ドイツでは、公的な補助が手厚い。

・ミュンヘン大学の障害学生への支援担当の課では、学生本人が希望すれば受けられる、様々な障害に対するサポート体制や補助具等を備えていた。

(2) 授業での配慮について

・教師と子どもとの言葉でのやりとりで授業を進めており、教師や友だちの話を最後まで聞いてから自分が話すルールが小さいうちから指導されている。

・ロジャーのマイクを通して教師がささやき声で呼名するなど聴覚活用を重視する一方で、発音指導では、サイン等の視覚的な手がかりを適宜使用している。

・特に小学校では、一つの単元に対して丁寧にかなり時間をかけて指導している。

(3) その他

・小さいうちから授業の最後に自分の言葉で分かったことや難しかったことを発表し、振り返っている。

・体全体、指先を使って、たとえば、国語では、発音や

音節を、算数では、数の概念を教えている。

・教師が個々の子どもに目を向け、熱心に指導している。

(3) は一見、インクルーシブ教育とは無関係のようであるが、本稿 2 でも述べたように、インクルーシブ教育の成功には特別な支援を必要とする子どもの課題を把握して、当たり前前を当たり前前に指導できる教員の力量が大きく関わっている。子どもへの的確なアセスメントによる個別の指導計画等を作成し、エビデンスベースを持った保護者への説明と支援ができる教員、さらに実際の指導ができる専門性を持った教員の養成が日本でもドイツでも課題である(四日市他, 2018)。

[謝辞]

本研修のために研修プログラム(研修先への連絡調整等を含む)を作成してくださったミュンヘン大学教育心理学部聾教育部門 Annette Leonhardt 教授をはじめ、現地での見学先への案内等をしてくださった先生方、我々の来訪を歓迎して下さり、質問に丁寧に答えて下さったり、資料などを快く見せて下さったりした見学先の先生方にこの場を借りて御礼を申し上げます。

[付記]

本稿は、聴覚障害 冬号 2018 年度 Vol.73 通巻 776 号。ジアース教育新社 掲載から一部を抜粋した。

[参考文献]

- 1) 鄭仁豪 (2012) ドイツの聴覚障害教育の紹介. 聴覚障害. 聾教育研究会, 10-17
- 2) 鈴木祥隆・前川久樹・趙成河 (2014) ドイツ・バイエルン州における聴覚障害教育. 聴覚言語障害, 43 (2), 105-111
- 3) 四日市章他 (2018) 聴覚障害児の学習と指導 発達と心理学的基礎. 明石書店, 第 12 章